



問題解決型救急初期検査

第2版

田中和豊 著

●B6変型 頁512 2019年1月

定価：本体5,000円＋税

[ISBN978-4-260-03598-9]医学書院刊

本書は、救急のマニュアルとしては最も有名なものの1つである。田中和豊先生の『問題解決型救急初期診療』(医学書院)の姉妹本にあたる同著者の「検査版」の第2版である。

検査と銘打たれているが、本書の本質は検査の解説本やマニュアル的な内容ではない。

「この本を眼の前の患者を救いたい人に捧げる」とだけ書かれた冒頭のページは鮮烈である。救急現場で疾患と対峙する医師ならではの魂のこもったお言葉と思う。田中先生は自分より10年ほど上の学年の先生にあたられるが、このような先生が自分が1年目の時に上級医にいらしたら、どれだけ心強いのか。勇気が湧き明日へのモチベーションが高まることは、自分の研修医時代を振り返っても想像に難くない。

「診療」は初版が2003年、「検査」は初版が2008年である。これらの本がなぜ長く読まれているか。序文にも書かれているが、エビデンスに配慮するだけでなく、ご自身で実践されていないことは記載しない、という田中先生のポリシーが活きているからだと感じる。ベッドサイドの実感を伴わない臨床教育は内容が薄い。これは評者自身も日々感じていることであり、患者不在のディスカッションや一般論は、魂に刻み込まれることはないだろう。一見すると「実践していないことは記載しない」という本書の方針は一般化されたマニュアル的書籍としては異彩を放つように映るが、実臨床家の眼から見れば大変リーズナブルである。また、幸い本書はマニュアルのように見えて、マニュアルとは銘打たれていないところに独自性が高い。

本書の臨床的こだわりは随所に見られる。検査という本のタイトルからにわかに想像する採血や尿の検査などの総花的マニュアルという印象を覆し、470ページにわたる本文のおよそ3分の1までが臨床の考え方

をまとめた総論につづくバイタル・サイン(とモニタ)、フィジカルに割かれている。これは、バイタル・サインの測定と解釈やフィジカルもれっきとした検査であり、またそれらの検査は項目が少ないながらも、より高度なテクノロジーを要する現代医学の検査を圧倒するような情報量を秘めている、という田中先生の強いメッセージが込められた結果であると感じる。実際に救急の現場では、一般採血や尿を見てマネジメントが変わることもたまにはあるが、大方の方針はフィジカルまでで立ってしまうことが多い。例えば発熱の患者では、救急外来における採血が与える熱源に関する情報は極めて限定的であることは、読者の皆さまなら想像に難くないだろう。フィジカルの章も、目次だけを見ても素晴らしい。フィジカルが網羅的に並べられるのではなく、呼吸、循環を筆頭に、危険な病態を示唆する腹部や皮膚といった項目が優先的に並べられていることなど、現場で用いるフィジカルが濃淡をはっきりさせて記載されていることに強い共感を覚える。身体診察の2つ目の項目は「Stridorと肺音」という章だが、「呼吸」などと平板な章立てになっていない点など、重要度のメリハリを実感する内容で非常に良いと感じる。

肝心の「検査」の章だが、各検査について、不要な記載はなく、臨床の有用性や基準値、重要な表などがぎっしりと詰まっていて、この一冊さえあれば検査についての救急における重要点を十分に網羅できる内容になっている。

このように、本書は救急における熱いハートとメッセージがぎっしりと詰まった本である。コンパクトながら定価5,000円以上の価値は大きく、この本がボロボロになるまで使い込めば、その価値は10倍にも20倍にもなって返ってくるだろう。